

「だめ、だめだったら、抜いて、抜いてええっ」

教え子に股間のアワビを貫かれ、女教師も顔を真っ赤にして喚く。

「お願いだから、抜いて、抜いてえっ！」

首の筋肉を硬くし、両手の拳を固く握りしめる。なんとかして局部に突き刺さった肉の杭を抜き取らなければ。

しかし、女教師の説得はまったく効果をあげられなかった。

達川涼子と下半身でつながった少年は、女教師の言葉に従うことはなかった。少年はその代わりに、女の子宮の叫びに応えるようにして、腰をゆっくりと前後に動かすはじめる。体に刻みこまれている本能に従って、慎重に、前後に前後に……。

おそらくは保田少年には初めての経験だろう、だが若者は巧みに腰を動かし、女教師の熟れた果実の内側を刺激する。

「あ、あがああっ、おっ、お願い、動かないでええっ」

達川涼子は、ほとんどケダモノのように吠えた。教室での公開自慰にはじまり、全裸の逃避行。女教師の理性と自制心は実はいやらしい仕かけによって、相当に削られていたのだ。

「そんなに、そんなに動いたら、動いたら……あはーっ」

女教師は睫毛に涙を光らせて、唇をわなわなと震わせる。教え子は美しい副担任の抵抗を粉碎するように、さらに腰を走らせる。無慈悲に、スムーズに。濡れて綺麗に輝く肉色をした粘膜。その中心を硬く勃起した若い肉の銚が軽快に滑る。

青い肉のピストン運動をもらって、女教師のアワビは、まるで感極まったようにして透明な涎れを吐き散らし、湿った肉音に合いの手を入れるように、若者の肉袋が女の下半身を叩く。

女教師のすぐ目の前で、谷津春菜が、向島早枝が、鮮血を垂れ流したまま、男子生徒たちに蹂躪じゅうりふされている。谷津春菜と向島早枝だけではない。すべての女子生徒の若く青い肉貝が牡に貫かれ、ほじられ、熱く充血して甘い汁を垂れ流している。

「せつ、先生っ、ああっ、先生っ、あそこが、あそこがああっ！」

向島早枝の表情は、すでに牝のそれとなっている。

「あそこが痺れて、痺れて……。うはああっ」

学院長が陰部に塗るようにと指示した軟膏なんこうは、驚くべきことに本当に、娘たちの散華げの痛みを和らげたようである。それだけではない。少女たちは初めての体験にもかかわらず、すでに悦びに喘ぐまでに成長しているのだ。

淫薬の効果は、自身が局部を貫かれる女教師も理解していた。

「お、おお、おおーっ！」

達川涼子は吠えた。薬をたっぷりとりこまれた肉の花弁が、焼けるように火照り、粘膜がペニスのひと突きごとに、まるで感電するようにして痺れている。

女教師の理性が、プライドが、信念が、快感の大波によって砂の城のように崩れていく。

——もう駄目、もう……。

女教師は白目を剥き、犬のように無様な鳴き声をあげる。

美人教師の口からもれた、それが敗北宣言であった。

理性を削り取られ、今や生身の牝に剥かれた達川涼子を、教え子の若者はさらに追いつめる。

腰を動かしながら、その一方で女教師の陰核を丁寧な指で愛撫する。膣内とクリトリス。感じるポイントを入念に苛められて、女教師はいよいよ切羽つまってしまう。

襷の重なり合う部分、アワビの頭の部分が念入りに揉まれる。

愛液でたっぷり湿り気を含んだ熱い粘膜の中心で、若い牝の欲望がなめらかに踊る。

女教師はあまりの気持ちよさに我れと我が職責を置き去りにして、ほとんど号泣す

るようにして嗚咽する。

「うう、うひいっ！」

初めて味わう苛烈な局部への刺激。達川涼子はそれまでの人生で、これほど強烈な女悦を味わったことがなかった。

未体験の快感。味わったことのない常習性のきわめて高い悦び。子宮をわしづかみにされて激しく揉みしだかれ、胎内に滞っていたいやらしい汁をすべて絞りだされるような感覚。

激烈なまでの女の業苦ごうくに、美人教師は汗まみれになって七転八倒する。

「くはああっ！」

叫ぶ女教師の前では、初めて男を知ったばかりの谷津春菜が、長身を引きつらせて、行為に没頭している。

「戸田、それはっ、あーっ！」

ワイルドな感じのする不良娘は、すでに快感を完全に覚えて自分の物としてしまつたらしい。若い牝にクリトリスを揉まれ、膣内をほじられた若い牝は、まるで副担任と張り合うようにして腰を自ら振っている。

谷津春菜だけではない。向島早枝も固く目を閉じ、膣を中心にして腰を右へ左へせ



わしく回転させている。

他の娘たちも同じであった。追いたてられ、裸のまま逃げ惑い、ついには捕らえられて<sup>なぶ</sup>廻りものにされる——。だというのに、少女たちは、呪われた運命を喜々として受け入れ、まるで愉しむようにして、腰を自ら破廉恥に振るう。

「あんああーっ、もう駄目、もう駄目、ああーっ！」

前田梓がまるで雷に打たれたように身体を痺れさせれば、高原京子も絶叫する。

「き、気持ちいいっ、気持ちいいーっ！」

初めて局部を貫かれる少女たちでもそうなのだ。

小笠原美沙や工藤忍のように、すでに女の悦びを知った娘たちは、神聖な秘所を苛め抜かれる快感に酔いしれ、ふらふらになっている。

「あはああつ、忍つ、私、イキそう、イキそう……」

「美沙、私も、もう、我慢、我慢できない……」

二人の娘は、心の底からの親友なのだろう。お互いの手を握り、顔を汗ででからせて悶えている。

若い牡たちはそんな少女たちを、上手に責めたて、天の頂へ、高みへと導いていく。ズボズボと、少年たちのペニスが、少女たちの敏感で感じやすい股間に快感を注ぎ

つづける。

透明なラブジュースが少女たちの火照<sup>ほ</sup>った肉貝から飛び散り、少女たちの乳首がそこここで硬く勃起する。

「あぁーっ！」

「もっと、そこそこ！」

「だ、だめ、だめ、そこは、そこはーっ！」

あまりの気持ちよさに女たちは気が違ったように泣き喚く。達川涼子も教え子に無残に貫かれ、膣内を激しくかきまわされ、意識をずたずたにされ、一匹の牝として快感に没頭する。そして……。

「あ、あ、あ、イクイク、イク……」

工藤忍が、ぶるぶると身を震わせ「あーっ！」と甲高く鳴いた。その叫びを合図に次々に少女たちは、麗<sup>うるわ</sup>しい快楽の園へと飛びたっていく。高原京子が、牧野茜が限界の悲鳴をあげる。

「ああ、なにか、なにか出る！」

高原京子は初めての快感に身悶えすると、奇妙なエキスを膣内から大量に噴射させる。